

◇左のページの「福は内」の続きを書きます。「福は内」の合の手は、「鬼は外」です。旧年の歳晩は映画『鬼滅の刃』のヒットもあって、「鬼」の字に出会う機会も多かったのですが、節分の掛け声は一般には、「福は内、鬼は外」。しかし、「鬼は外」のみを連呼する神社や、「鬼は内、福は内」と唱える寺院もあるようです。例年、多くの参拝客が集まる成田山新勝寺では、「鬼は外」とは言はずに「福は内」だけを連呼するという。なぜか？鬼を嫌って追い立てるだけでは、どこかよそへ行つてまた悪事を働くかもしれない。鬼を追いはらうことなく、福に変えてしまうのが、成田山のご本尊である不動明王のご慈悲だから。そういうえば、私の知っている

後編 集記

某寺は、節分の夜に山門を開放するという。あちこちで追い立てられた鬼がかわいそうだから、寺内へかくまってあげるのだという。
◇仏教は鬼にやさしいのです。たとえば、夏のお盆の時に読むお経に次のような一節があります。「汝等鬼神衆(ジテンキンシユウ)、我今施汝供(ゴキンスジキユウ)」。現代語訳すれば、「お前たち、もろもろの鬼神たちよ、私はお前たちにお供えし

よう」。つまり、鬼がお腹をすかしていると悪い事をするから、鬼にも食事を供えて、静かにしてもらおうというのです。
◇仏教は鬼を退治しないのですが、鬼を退治したのは桃太郎です。童謡『桃太郎』を思い出せば、「桃太郎さん、お腰につけたキジ団子、一つわたしたくださいな」とねだったイヌ、サル、キジを同伴にして「のこらず鬼を、攻めふせて、分捕物を、えんやらや」。悪をこらしめ、善を勧める物語です。そういう単純な思考に反論したのは福沢諭吉です。曰く、「もゝたるふが、おにがしまにゆきしは、たからをとりにつくといへり。けしからぬことならずや」。鬼ヶ島にある宝は、鬼の所有物である。それを理由もなく取り上げるおとすれば、むしろ桃太郎は盗人だといふのです。
◇諭吉先生が没してから百年後、2013年の新聞広告に次のような文字がありました。「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。その下には、こう書いてあります。「一方的な『めでたし、めでたし』を、生まないために。広げよう、あなたがみている世界」。カチンカチンの頑固頭ではなく、こういうやわらかい発想をしたい。(博芳

「床の間」とかいて、「このま」と読みます。日本間で一段高くなつていて、花を活けたり、墨跡をかけたります場所です。台所やトイレのように、生きるために、どうしても必要な場所ではありません。言ってみれば無駄な空間です。無駄な空間をつくる余裕が、ゆとりを生みます。ゆとりがあれば、困ったとき、あるいは順調な時に、止まってみる勇氣もわいてきます。でも、

「そんなゆとりは、一般の住まいには無理」
なんていうのだったら、お寺へいきましよう。お寺には床の間があつて、季節の花はない場合もあるけれど、なにかの墨跡がかかっているはず。墨跡ときいて一般的に思い浮かべるのは、くずし字で読めないし、意味もはっきりしない軸物でしょう。わかりやすい楷書体のものであるのですが、大多数は判読に苦労します。そこで、「住職のための墨跡読み方講座」なんていうのもひらかれています。無精者の私は行かない。行かない



から不勉強で読めない。だから、「おしょうさん。床の間の軸物はどつ読むのですか」なんて尋ねられても困るから、判読できる墨跡のみを床の間にかざっています。
新しい年の冒頭にご紹介する色紙も読みやすいのではないのでしょうか。「福は内」。元妙心寺派管

長・河野太通老師の御染筆です。太通老師は昭和五年のお生まれです。九十一歳になられます。「福は内」の色紙をいただいたのは令和元年の秋でした。その時は当たり前すぎて、「ちよっと」という感じだったのですが、感染症の世界的流行を予見していたわけではないでしょうけれど、「福は内」とは、すこぶる今日のなごとはです。「いつにもならない時は、じつと我慢。幸福は遠い外ではなく、すぐ近くの内にあるよ」と。まだまだ油断できない時節。「内なる福」をみつきたい、新しい年の初めです。(住職記)

連続シリーズ「見つけた」

禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちよぼけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」

見つけた!

「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

凡人は予想だにできなかった新型ウイルスがはびこつて、「三密」なんて言葉も耳になじんだ昨今ですが、今度は「5つの小」なぞというキャッチフレーズがテレビで流れていました。「5つの小」のなかに、「料理は小皿に分けて」というのがあります。それを見て、「今年の冬は、鍋料理もダメか」と、悲嘆にくれるご同輩もおられるにちがひありません。



持鉢

スーパーコンピューターで、飛沫の解析をしながら、経験として疫病から自己と他者を護る術を会得して、実践していたのでしょうか。そうした生活の智慧は、現代の禅の修行道場にも残っています。禅の修行者(雲水)の食器を持鉢といひます。大小五つのお椀が一セットで、重ねればひとつのお椀のようにコンパクトになります。アウトドア用品にもそういう食器があるじゃないですか。あの元祖といえればわかりやすいでしょうか。

だが、だが、しかし。一つの鍋を数人でつづく鍋料理の歴史は浅いと、『考証要集』(文春文庫)という本が教えてくれます。著者の大森洋平氏はNHKでドラマの時代考証を担当しているディレクターです。では、『考証要集』から「鍋料理」を引用すれば。
(ゆめゆめ江戸時代劇で貧しい長屋の住人たちに、親睦のために鍋料理を食べさせてはいけぬ。「てやんでえ、そんな下衆(げす)なもの食べるか、見損なうねえ」と叱られる。皆で鍋を囲んでつきあう食べ方は、江戸では下衆の極み「以下物」とされていた。大鍋の汁は必ず各自の椀によそつてから、大皿に盛つた料理も、仲居が各自の皿にきちんと取り分けてから食べ始めた。文明開化の牛鍋も一人前ずつの小鍋が基本。東京に鍋料理が定着するのは、地方出身者が急増した明治後半から大正期であるという)

スーパーコンピュータで、飛沫の解析をしながら、経験として疫病から自己と他者を護る術を会得して、実践していたのでしょうか。そうした生活の智慧は、現代の禅の修行道場にも残っています。禅の修行者(雲水)の食器を持鉢といひます。大小五つのお椀が一セットで、重ねればひとつのお椀のようにコンパクトになります。アウトドア用品にもそういう食器があるじゃないですか。あの元祖といえればわかりやすいでしょうか。

そういえば、池波正太郎が描く『鬼平犯科帳』の長谷川平蔵も小さな鉄鍋にはいった「軍鶏鍋」をひとりずつつけていますね。今でも、一人用の鍋で料理を供する老舗が何軒か残っているというから口ナが収まったら行ってみたい!

が修行道場にはいる時の要件なんて宗派は、禅宗だけではないでしょうか。いろいろな理由からマイ食器になつたのでしょうか、疫病対策のひとつだったかもしれません。そして、「5つの小」の中に、「小声」というのがありますが、道場では食事中は無言です。無言であるために、その場で居合わせた者どうしが意志を通わせるための共通の作法もあります。坐禅をするのも、食事をするのも修行という意味なのでしようが、無言も疫病を乗り越えるため、生活術だったのかもしれない。彫刻家であり画家であり、造園家でもあったイサム・ノグチ(1904~1988)は、「禅は生活の技術」と言っていますから。